

神奈川県自然の危機を告げるレッドデータ生物

浜口哲一（平塚市博物館学芸員）

レッドデータとは？

昨春に、生命の星・地球博物館から「神奈川県レッドデータ生物調査報告書」が刊行されました。それを記念して、この夏には特別展も開催されています。県の自然に興味を持つ人間にとって見逃せないこの調査をお手伝いした立場から、報告書の内容や意味についてかいつまんで紹介してみたいと思います。

そもそもレッドデータとは何のことでしょうか。この言葉は、IUCN（国際自然保護連合）が1966年に初版を発行した、レッドデータブックに基づいています。この本は、世界的な規模で、絶滅の恐れのある動植物の種を取り上げ、それぞれの分布や生息状況などについてまとめたものです。そして、その名の通り、赤信号を示す赤い色で装丁されています。

国際的なこの仕事に対応して、日本でも環境庁によって全国規模の調査が行われ、1989年から1991年に、植物、脊椎動物、無脊椎動物のそれぞれについて、「日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック」が刊行されました。1996年には植物群落編も刊行され、日本国内でどのような生物が危機にあるかの基礎資料がまとめられました。

しかし、日本版のレッドデータブックが、全国各地の野生生物保護にそのまま適用できるわけではありません。全国的には普通種と言えるが、ある地域では貴重だといった例は数多くあるからです。そこで、県や市町村は、それぞれが地元でのきめの細かい調査を行い、それに基づいて独自のレッドデータブックを作る必要があります。昨年、神奈川県版が刊行されたのは、そうした意味でのことなのです。

レッドデータ度の評価

レッドデータブック神奈川版は、県立博物館が中心になって組織した、「神奈川県レッドデータ生物調査団（城川四郎団長）」によって、3年間の現地調査と文献収集を通してまとめら

れました。

どの種が絶滅の危機にあるかをリストアップすることが、レッドデータブックの主要な目的ですが、そのためにはそれぞれの種の過去と現在の分布を把握し、その上にたって評価を行う必要があります。これは実際には非常に困難な仕事ですが、神奈川県には長年にわたる情報の蓄積があり、次の5つに分けて評価を行うことができました。

1. **絶滅種**／かつては神奈川県に分布していた確実な記録があるのに、現在は見られなくなった種。戦前に既に絶滅していたニホンオオカミやカワウソのような種もあり、アツモリソウ・ダイサギソウのように比較的近年の乱獲が原因で絶滅したと考えられる種もあります。
2. **危惧種**／現在県内で数ヶ所の産地を残すのみで、近い将来の絶滅が心配される種。ツキノワグマのように絶滅の恐れが極めて強い種もあり、ツマグロキチョウのように1980年代になってから急速に減少し危惧種になった種もあります。
3. **減少種**／過去と比較して明らかに、分布域の縮小や個体数の減少が起きている種。カタクリ・サツキ・エビネ・ムササビ・テンなど、名前のよく知られた多くの種類がこのランクに評価されています。
4. **希少種**／もともと県内での分布が限られており、その地点での状況に大きな変化はないが、容易に絶滅する危険がある種。藤野町のモリアオガエル、丹沢のヒダサンショウウオなどがその代表です。
5. **健在種**／全体的にみて比較的、以前と変わらない勢力を保っている種。

どんな動植物が危機にあるか

報告書には、植物、脊椎動物、昆虫のそれぞれについて、レッドデータ度の一覧表が示されています。それ

を見ていくと、特にどんな環境にすむ種類が危機にあるかが浮かび上がってきます。

一つは、水生の動植物です。植物では、タチモ・ヒンジモ・ジュンサイ・ヒツジグサ・アサザなど多くの水草が絶滅したことが明らかにされました。淡水魚でも、ミヤコタナゴなど3種のタナゴ類が絶滅したと判断され、スナヤツメ・カマキリなど危惧種も20種を数えました。これは、高度経済成長期以降の水質の汚染と、河川改修工事や埋立などによる水辺の改変が原因であることは言うまでもありません。

もう一つ目立つのは草原性の動植物の減少です。例えばチョウ類で絶滅種にあげられたゴマシジミ・ヒメシジミ・オオウラギンヒョウモンなどは、草地に生息する種で、神奈川県にもともと乏しかった草地環境が、開発によって追い打ちをかけられ、姿を消したと思われます。クツワムシ・キリギリス・マツムシ・スズムシといった代表的な鳴く虫も減少種と評価されました。これらも草原や林縁のマント群落を生息地にしており、市街地化の進行とともに、空き地がなくなり、やぶが切り開かれ、公園などに残された林も徹底的に下草が刈られていることが、これらの種の存続を危うくしているようです。

また、丘陵地の里山を本拠地としている動植物の中にも絶滅に瀕しているものがあります。かつての多摩丘陵、三浦半島、大磯丘陵などには、谷戸を中心に雑木林の広がる景観が続いていました。そうした環境に見られたオオムラサキなどは減少種と評価され、甲虫類でもオオクワガタなどの衰退原因に雑木林の減少が上げられています。三浦半島のトウキョウサンショウウオ、かつては各地に見られたイモリなど里山の水系に生息していた動物の減少も顕著です。

山地の森林にすむ動植物の中にも減少している種はありますが、全体的にみると平地や丘陵に生息し、かつて我々の身近な存在であった動植物こそ、

危機にあるのです。このことは、今後の神奈川県自然を考える上で忘れてはいけない視点と言えるでしょう。

絶滅に向かう原因／河原の場合

危機種や減少種の集中している環境の一つに、河原の砂礫地があります。そこでは、どんなことが原因になって、動植物が減少の道を歩んでいるのか、具体的に見ていくことにしましょう。

相模川や酒匂川の中下流には広い河原や中洲が広がっている場所があります。そうした場所は一見すると、何もいない荒地のように見えますが、よく調べてみると、そうした環境だけにすむ特有の動植物が見つかります。例えば、カワラハハコ・カワラヨモギ・カワラサイコなど、名前にカワラとつく一群の植物があります。相模川の中流には全国的にも分布が狭くて貴重なカワラノギクの群落があります。これらの植物は、乾燥しがちで栄養分も少ない河原を生活の根拠地とし、疎らな群落を作っています。厳しい環境に耐えられる強い植物とも言えますし、条件のよい所では他の植物との競争に負けてしまう弱い植物ということもできます。そして、どの種も近年減少気味で、報告書ではカワラノギクとカワラアカザが減少種に評価されています。

また、そうした植物が点々と生える

砂礫地には、カワラバッターが生活しています。カワラバッターは、砂色をした大型のバッターで、飛ぶと後翅に青い模様のあるたいへんきれいな種類です。かつては相模川や酒匂川の河原に普通にいたのですが、近年急激に数を減らし、今では探すのが難しいほどで、危機種とされています。

また、河原の砂礫地は、水鳥の重要な営巣地にもなっています。その代表はコアジサシで、夏鳥として飛来し、春から夏に大きな川に行くと、優雅に飛ぶその白い姿を見ることができます。コアジサシは河原などの砂礫地や砂地に集団で巣を作る性質があり、かつては相模川や酒匂川の河原や中洲のあちこちで巣を作っていました。ところが、この鳥の集団繁殖地もすっかり少なくなってしまい、危機種に位置づけられています。

それでは、なぜこれらの動植物が減少してきたのでしょうか。その原因の一つは、河川敷の利用が進み、グラウンドに造成されたり、駐車場になって、砂礫地そのものが減少したということです。各種の河川工事で大型のブルドーザーが頻繁に川に入り、河原を掘り返したり、ならしたりしていることも減少の要因になるでしょう。

もう一つの大きな原因は車がどんどん河原に入り込むようになったことで



車の侵入が河原の動植物を追いつめている

す。4輪駆動車の普及と、いわゆるアウトドアブームで、河原を走り回る人が増え、コアジサシの場合は車が巣をひきつぶすような直接的な被害もおきています。また車が走り回ると、石と石の隙間がなくなり、虫たちの生息場所が奪われる結果にもなります。

水質の汚染も減少の遠因になっています。汚染が進むと、河原にも有機物が堆積するようになり、だんだんと富栄養化していきます。それにつれてヨモギ・イタドリなどが勢力を増し、結果的にもととの種類を圧迫していくことになります。

また、利水と治水のためにダムが作られ、川の水量が安定してくると、増水が河原を洗うことが少なくなります。そのために、植生の遷移が進み、よく茂った草地に変わっていきます。すると、砂礫地特有の動物は姿を消し、コアジサシなどの営巣にも不適な環境になってしまうのです。

このように、河原一つをとっても、その環境の変化に影響を与え、生物の減少を引き起こしている要因は複雑で、しかも人間社会の有りように深く関った問題が多数あります。従って、レッドデータ生物調査の結果に基づいて野生生物の保護を進めていくことは、一朝一夕には進まない困難さを持っています。しかし、それだけに、行政と市民と専門家が、知恵と力を出し合って取り組んでいくべき課題なのです。

多くの危機種や減少種は、神奈川県自然から多様性が失われていることを警告しています。今こそ、その警告に真剣に耳を傾ける必要があるでしょう。



多くの貴重な動植物の生息地である河原の砂礫地



保護色の発達した危機種のカワラバッター



減少種のカワラノギク



河原で卵を抱く危機種のコアジサシ